

# Smoke On The Water

スモーク・オン・ザ・ウォーター



Deep Purple  
ディープ・パープル

1968-1976, 1986-

## エピソード

イギリスが生んだ最高峰のロック・バンドのひとつ、ディープ・パープルの最大ヒット・アルバム『MACHINE HEAD<sup>\*61</sup>』からのシングル・カット曲で、メンバー・チェンジ前の大ヒット曲「Hush<sup>\*62</sup>」以来、5年ぶりに全米チャートのトップ5圏内に入る大ヒット曲となり、ゴールド・ディスク認定となった。当時の——そして恐らく今も——ギター少年たちは、必ずと言っていいほどこの曲のイントロ部分の印象的なギターのリフを真似したものである。

実況中継のようなこの曲の背景は有名で、実際に起きた事件が歌詞にそのまま綴られている。1971年12月4日、ディープ・パープルはスイスにあるモントルー・カジノ<sup>\*63</sup>の一角で新譜をレコーディングするはずであった。ところが、前日の12月3日、フランク・ザッパが同会場でライブを行っている最中に、彼らの偏執的ファンが隠し持っていた信号拳銃を建物の天井に向けて発砲し、瞬間に火が燃え広がってカジノが全焼する大惨事へと発展。レコーディング先を失ってしまったディープ・パープルは、そのせいで他の場所を探さなければならなくなった。ローリング・ストーンズがレコーディングに用いていたことで知られる移動式スタジオ<sup>\*64</sup>を借り、モントルー郊外にある古びたホテルで『MACHINE HEAD』のレコーディングを行わざるを得なかった、というエピソードは、広く人口に膾炙している。

## ストーリー

翌日に俺たちがレコーディング場所として使用するはずだった、レマン湖畔にあるカジノで、フランク・ザッパの演奏中に火事が起き、建物が全焼してしまった。火柱が空に向かって高く立ち上り、レマン湖の水面の上を煙が漂って<sup>\*65</sup>、会場は大パニック。カジノは爆音を立てながら崩れ落ちてしまった。俺たちがスイスに滞在している日数もあとわずかか。早いとこ違うレコーディング先を探さなければりやならない。ようやく探し当てた空室だらけのホテルで、苦肉の策で部屋や壁にベッドのマットを立て掛けて防音装置代わりにし、無事にレコーディングをやり遂げることができたわけさ。それにしても、カジノでのあの出来事は決して忘れないだろうな。

## Smoke On The Water の

### キーワード & フレーズ

- (a) a mobile
- (b) be at the best place around
- (c) the Rolling truck Stones

これももしメロディを持つ楽曲でなかったなら、歌詞はあたかもモントルーのカジノのライブ会場で起きた火事の様子を伝えるニュースのようである。ところどころ、動詞が現在形になっていることも、この曲が実況中継のように聞こえる要因のひとつだ。しかしながら、怪我の功名とも言えばいいの、もしもフランク・ザッパのライブ中に火災が起こらなかったなら、ディープ・パープルの代表曲中の代表曲であり、ロック・ミュージック史上に半永久的にその名を深く刻むであろうこの名曲は決して生まれ得なかったのである。何とも不思議な運命の巡り合わせとしか言いようがない。蛇足ながら、フランク・ザッパは、その火事で、(当時の価値で)約5万ドル分の楽器や機材が焼失

★ 61 — 1972 / 通算6枚目のスタジオ録音アルバム / 全英アルバム・チャート No.1, 全米 No.7

★ 62 — 1968 / 全米 No.4, 全英チャートでは何故か振るわず、No.62 止まり

★ 63 — 現在もそこでモントルー・ジャズ・フェスティバルが開催されている

★ 64 — レコーディング機材を搭載したコンテナを積んだ車

★ 65 — the water = Lake Geneva or Lake Lemán

してしまうという憂き目に遭った。レコーディング先を失ってしまったディープ・パープルも気の毒だが、フランク・ザッパにも同情を禁じ得ない。

携帯電話やスマートフォンが普及した今でこそ、日本人にも(a)はカタカナ語の「モバイル」で通じるが、“mobile”は形容詞では「可動式の、移動可能な、車に取り付けた」という意味で、名詞では「可動装置」他に「動く彫刻」などという想像を絶するような意味もある。今ではカタカナ語でもすっかり馴染みのその単語を、この曲がヒットしていた1973年当時、いったいどれほどの人々が理解し得ただろうか。曲の冒頭に出てくる(a)には不定冠詞の“a”が付いているが、曲を聴き進むうちに、実はそれが(c)を指していることに気付く。

(b)は、曲の中では主語が“Frank Zappa and the Mothers”<sup>\*66</sup>になっており、直訳すると「フランク・ザッパ&マザーズは(カジノ周辺にあるライブ会場)一番いい場所で演奏していた」となるが、これは大いなる誤訳。“place”には、「音楽の一節」という意味もあり、つまり、同フレーズは、「フランク・ザッパのライブで曲が最高潮に盛り上がっていた」という意味なのである。そしてその盛り上がりの最中に、あの惨事が起きてしまった。“place”には「場所」以外にも多くの意味があるので、これを機に、今一度、辞書で調べてみては如何でしょうか。

ディープ・パープルによる造語とも言うべき(c)は、彼らのファンやロック愛好家の間では、昔から“The Rolling Stones Mobile Studio”と呼ばれてきた。カジノでの惨事を予想していたわけではないだろうが、ディープ・パープルは、レコーディングのために事前にローリング・ストーンズから移動式スタジオを借りていたのである。そのことへの感謝も込めてこの曲の歌詞に登場させたかったのだろうが、“The Rolling Stones

★66—the Mothersはフランク・ザッパと共にレコーディングしたりライブ活動をしたりしていたバンド

★67—このアルバムを、心からの感謝を込めて彼に捧げる

Mobile Studio”では、歌詞に組み込むのには長過ぎたのか、知恵を絞って彼らなりの造語の(c)を考え出して歌詞に綴ったのだろう。“truck”には「運搬車」以外に「移動台」という意味もあり、造語の(c)を意識するなら、「ローリング・ストーンズ愛用の移動式レコーディング機材(を搭載した車)」となるだろうか。

モントルー・ジャズ・フェスティバルの創設者のひとりであり、この曲の歌詞にもその名が登場する“ファンキー・クロード(Funky Claude)”ことクロード・ノブス氏は、目下、同フェスティバルの総括管理者も務めている。この曲が生まれるきっかけとなったあの火災が起こった際、ひとりの死者も負傷者も出さずに観客たちを避難させたのは彼だった。そのことへの感謝を込めて、ディープ・パープルは、『MACHINE HEAD』のLPのダブル・ジャケットに彼の写真を名前入りで掲載し、“To him, this album is gratefully dedicated”<sup>\*67</sup>と記している。予期せぬ惨事から生み出されたこの名曲の真の陰の功労者は、実はノブス氏だったのかも知れない。

167

全米 No.1 / 全英 No.31



## The Way We Were

追憶

Barbra Streisand  
バーブラ・ストライサンド

1942-

エピソード

この曲は、シドニー・ポラック監督、バーブラ・ストライサンドとロバート・レッドフォードが主演した大ヒット映画『THE WAY WE WERE (邦題:追憶)』のテーマ曲である。歌詞の内容は、物語の行方を暗示している。相反する政治思想を持ちながらも、どこか